

平成 20 年度 文部科学省 質の高い大学教育推進プログラム (教育 GP) 選定
学問探検ゼミを核とした高大接続教育
教員間および学生生徒間の連携活動による「学びは高きに流れる」教育体制の構築

キャンパスレポーター 研究室訪問

第 2 回

政治経済学 佐藤隆 准教授

レポーターの、大分雄城台高校 3 年、佐藤寿洋と岩城仁です。経済学部 3 年、石黒雅子です。

今回は、平成 20 年度後期の学問探検ゼミと一緒に学んだ私たち 3 名が、レポーターとして佐藤先生の研究室を訪問して、先生の学問内容やゼミ活動についてインタビューします。



石黒 まず、佐藤ゼミはどんなことをしているのですか？

佐藤隆 具体的に何をやっているのかは後回しにして、どんなふうに私が「ゼミ」ととらえているのかっていう話からしましょう。私は大学時代、じつはゼミに入ってい

なかったんですね。入らなくてもいい大学だったからというのもあるんだけど、ゼミじゃなくても勉強はできるだろうというのもあったし、興味があまりわかなかつたっていうこともあったんです。そんな私が今度はゼミで教えるにあたって心に決めたことがあるんですよ。それは、もう何十年も前の当時大学生だった私が、このゼミなら入りたいなって思えるようなゼミをやろうってね。何十年も前の大学生だった頃の私と、今の私とが見えない約束をしていて、今の私は当時の私を裏切らないようにしようって、そう誓ってやっているんですよ。だからっていうわけではないけど、経済学にあまり興味を持ってない人でも、ゼミに入ってやっていくうちに、結果的に経済学っておもしろかったんだって思ってくれるように、入口を広げておこうって思っています。

経済学の名探偵を養成する

佐藤隆 じゃあ、どんなふうにゼミをやろうかと色々考えた結果、ゼミのテーマっていうのを決めてね。



● 経済学部
経済学科
政治経済学
佐藤 隆 准教授
プロフィール

経済学博士 (東京大学)。専門分野は、経済理論、政治経済学。現在のテーマは、資本論・経済学批判。

主な担当科目は経済学Ⅲ、政治経済学など。

趣味は、レストランで食べた美味しい料理を自分でつくること。

それが「経済社会の『謎』を解く」というものなんです。高校の勉強ってというのはたとえばある種の受験数学なんか典型的だけど、ある問題が与えられていて、問題文を読んで解答を自分で考えていくわけだよ。でもその Q&A のクエスチョンみたいな問題だけじゃなくて、社会には社会問題とか経済問題っていうような問題っていうのもあるわけ。クエスチョンじゃなくプロブレムみたいな感じと言えばわかるかな。そういう問題に対してどういう解答を出していくかっていう、問題を発見して自分で解く作業が経済学者のやっていることなんだよね。で、こういう作業は名探偵が謎を解く謎解きに似ているんですよ。経済学者が経済問題も解くのも、推理小説にでてくる名探偵が謎を解くのも、同じ「解く」なんです。たとえば、何千億ドルみたいな金持ちがいるニューヨークの街の片隅には、同じ街なのに路上で寝ている人がいたりする。人間の能力なんて、あいつはすごいっていても 100 メートル 3 秒で走れるわけでもないから、能力の差なんていうのは誤差の範囲に過ぎないわけですよ。人間の能力の差なんてたいしたものじゃないのに、能力以上に差がついてしまっているように見えるわけ。どうして人間の能力は大した差が無いのに結果的に社会では差が開いちゃうんだろう？ これは一つの謎なわけです。謎があるのは何も推理小説の中だけではなくって、こうした目で社会を見ると、世界は謎に満ち溢れています。なんでこの世界には、飢え死にする人と肥満で悩む人が同時にいるんだろう？ なぜ、ほんの一瞬で巨万の富を儲けている人と一生働いても貧困から脱け出せない人がいるんだろう？

てね。で、こういう謎を解くというか問題を解くというか、こういうのは、受験問題を解くっていう問題とは違った問題で、ある種謎めいたところがあるわけ。社会問題っていう神秘的な謎があって、その謎を解く、それが私のゼミのテーマなんだよね。だから、ゼミ生はあたかも推理小説の探偵のように、普通の人は見過ごしてしまうような問題解決のためのカギを探して、そのカギでどうやって問題が解けるのか考えてもらう、そういうのをやっています。普通の人が見過ごしちゃうようなものって、何か例をあげるとわかりやすいかな？・・・そうだなあ、例えばエレベーターに乗ると鏡が貼ってある時あるよね。あれはなぜだろう？

石黒 防犯ですかね。

佐藤隆 君はなんでだと思う？

佐藤寿 身なりを整えるとか…。

佐藤隆 まあ、思いつくのはだいたいそんなものが多いよね。他なんか…。

岩城・佐藤寿 他ですか？えー、エレベーターですよ…うーん。



佐藤隆 なんだと思います？ 身なりって思うのは、わかんない心境じゃないですよ。鏡の前に立ったら、やっぱり髪の毛をこう・・・やってしまうもんね（笑）。

石黒・岩城・佐藤寿 そうですよ。

佐藤隆 でも、みんな違うんですよ。きっと思いもよらないですよ。答えは・・・バックミラーの役割なんです、車椅子の人のための。

石黒・佐藤寿 ああー！はい。

佐藤隆 車いすの人って、エレベーターに乗る時は前から入っていくでしょ。エレベーターの中は狭くて180度回転できないから、降りるときは後ろから降りることになるよね？そのとき、開いた扉の後ろに人がいるかどうか確認するためのものなんだね。

石黒・岩城・佐藤寿 ああー！

佐藤隆 存在しているものには、それなりの理由があるんですよ。こう言うと、なんかのドラマみたいですが（笑）。私たちは鏡を見て車いすの人のためだとは思ってもよら



ないよね。不思議にも謎にも思わない。だけど、それをなぜだろうって思える名探偵みたいになってほしいんだよね。福祉や法律の勉強をすると、エレベーターに鏡を設置するのが望ましいってというのがわかる。これは勉強の効用だね。勉強ってというのは、私たちが普段気が付けないようなものを気づかせてくれる原理なんだと思っているんですよ。そういう勉強をみんなでやりたいなって思っています。そんなわけで、私は自分のゼミを自分で「名探偵養成講座」って呼んでいるんです・・・こう言うと、尾行の仕方とか教えてそうだけど（笑）。

岩城 具体的にはどんなことをしているのですか？

映画を見るのも経済学

佐藤隆 3年前期は、特に経済や経済学に興味のない人でも楽しんでもらえるように、謎解きの楽しさみたいなものを味わってもらいたいと思って、色々な素材を使って経済や社会に関する問題を考えていきます。一見、何の変哲もないものに見えるんだけど、実は深い意味を発見できるって素材をやりますね。ある年はマンガを読みましたよ。ラブコメディだったんですけどね（笑）。毎年必ずやっているのは映画です。

石黒 どんな映画ですか。

佐藤隆 もちろん経済関係のドキュメンタリー映画を見て経済のことを考えたりもするんだけど、一番経済と関係なさそうに見えるのは・・・「マトリックス」っていう

SF 映画かな（ウォシャウスキー兄弟監督、1999 年）。映画をゼミで扱うときは、監督は何を意図してこのシーンを撮ったと思いますかっていうふうに問いかけて、それを推理してもらいます。鏡を見ても、なぜ鏡があるんだろうとは思わないって話をしましたよね。それと同じで、普通の人は映画を見ても、なんでこのシーンがあるんだろうって思わないみたいなんです。だからゼミでは、普通の人なら見過ごしてしまうシーンでも、実は深い意味を発見できるってことを実際に推理してもらいます。ほかにも、ゼミ生には作品の時代背景や関連事項を調査してもらいます。ゼミ中には、そうした事前調査や推理結果を報告してもらい、それが正しいかどうか皆で検討します。3年の前期はこんなふうに、経済に限らず色々な素材にチャレンジしています。



佐藤寿 では3年後期からは？

佐藤隆 後期は、毎年、経済学部教育支援研究室が学生懸賞論文を募集しているので、それにグループで応募します。入賞を目指して専門文献の輪読や論文の草稿発表するのが主な内容ですね。論文のテーマは、グループごとに分かれて自分たちで自由に決めてもらうので、毎年バラバラです。例えば中国経済、社会保障、大分県のゴミ問題とかね。おかげさまで、去年は3チームとも入賞を果たせました。

研究室が学生懸賞論文を募集しているので、それにグループで応募します。入賞を目指して専門文献の輪読や論文の草稿発表するのが主な内容ですね。論文のテーマは、グループごとに分かれて自分たちで自由に決めてもらうので、毎年バラバラです。例えば中国経済、社会保障、大分県のゴミ問題とかね。おかげさまで、去年は3チームとも入賞を果たせました。

石黒・岩城・佐藤寿 おおー！

佐藤隆 私もやったなって思いましたよ。で、4年の前期は就職活動で全員のメンバーが揃わないので、その年によってやることがまちまちです。4年の後期は毎年卒論を完成させるために発表を繰り返します。佐藤ゼミはこんなことをしています。

佐藤寿 ゼミってどんな感じなんですか？

佐藤隆 ゼミのやり方でいえば、12人のゼミ生が4人1チーム・合計3チームに分かれて、勉強してきたことを発表してもらってというのが一番多いやり方かな？ パワーポイントってわかる？

岩城 大丈夫です。わかります。

佐藤隆 発表するチームはパワーポイントで発表してもらって、残りのゼミ生はプレゼンの内容とやり方について皆で講評し合います。

ゼミの雰囲気であれば、ゼミ生同士は仲いいみたいですよ。旅行に行ったり飲み会やったりね。昔は合宿で夏の沖縄まで行ったこともありましたよ。合宿1日目は沖縄の観光協会の方にお話を伺う日で、事前にFAXで質問を送って、夏の暑い最中、みんな汗だくでスーツ着て、空港降り立ってすぐ直行、4時間くらいお話を聞いて、ホテルに着いてからも勉強していました。2日目はもう狂ったように遊んでいましたけどね（笑）。

佐藤寿 高校生からみて、大学で自主性に

まかせるといのは不思議な気がするのですが・・・高校だと黒板に書かれたものを見て勉強するので。

自分たちで問題を発見したり 推理するのがゼミ

佐藤隆 たぶんね、大学でやらなきゃいけないことに二つあるんだと思う。一つは高校と同じスタイルの勉強で、一言で言うと専門的な知識をマスターしてもらうこと。これは答えを覚えてもらうのとほぼ同じです。これなら黒板使ってもできるんですよ。数学の知識を覚えるとか英語の文法を覚えるとかだね。大学にも黒板に書いて教える授業はありますよ。これは「講義」っていうんだね。

でも、大学でやるべきことには、もう一つある。それは、解答を覚えるんじゃなくて、自分たちで問題を発見したり推理したりすること。問題を自分で発見したり推理したりするのは、自分たちで自主的に取り組まなきゃいけない。これが「講義」じゃなくて「ゼミ」の役割なんだよね。ゼミでは自主性を重んじる必要がある。自分で自分なりに問題はこれだと発見するのは、人に教わるんじゃなくて自分達でやらなきゃできないからね。たとえば、教員がゼミで答えを教えるっていうのは、推理小説を読んでいる最中の人に犯人を教えるようなものなわけ。犯人を教えるのではなく、犯人が誰か推理できる能力を鍛える、それがゼミの役割なんです。

佐藤寿 ゼミの紹介のところを拝見したんですけど、テーマで推理小説だとか名探

偵の本がでていましたよね、先生ご自身よく本を読まれるのですね。こちらにある本は・・・全部読まれたんですか？

佐藤隆 そう言われると必ず読んだって答えることにしています（笑）。

佐藤寿 ゼミ紹介で他にも気になったことがあります。研究課題のところに、佐藤先生の専門分野の一つで「経済学批判」っていうのがありますけど、これはどういう学問なのですか？

佐藤隆 「経済学批判」というのは、学問の一分野というよりは経済学を研究する上で取り組む姿勢みたいなものですね。経済学で今解けてない問題っていうのは実はたくさんあるんです。もちろん、実際の経済



の仕組みが問題なわけだけど、経済学そのものにも問題があるというふうに私は考えていて、今までの経済学を批判的に考え

なきゃいけない。「経済学批判」にはそういう態度表現みたいな意味を込めているのですね。今までの枠組みではうまく解けない問題があったからには、今までの枠組みを変えていかなきゃいけない。そういう主旨なんです。大ざっぱな話ですけど大丈夫ですかね？

佐藤寿 もちろん、大丈夫です。では、現在のニュースの先日の選挙とか、佐藤先生自身は、選挙でもいいですけど、気になっ

ているニュースはありますか。

不平等なことに心が痛む

佐藤隆 私が気になっているというか、心を痛めている世の中の出来事には共通点があって、だいたい二つに絞られます。一つは、不平等に関すること。たとえば、自分の親は選べないし、自分の生まれる地域も国も時代も選べない。でも、たまたまそこに生まれた人が国会議員になりやすかったりとか、大学に進学しやすかったりとかってというのは、不平等だと思うわけです。自分の努力とはなんの関係もない偶然性に人の運命が左右されてしまって、その結果ひどい目にあっている人の話を聞くと、心痛めることが多いですね。今で言うと貧困問題がそうですね。あともう一つ、世の中が先のわからない不安定な状態であること。たとえば、ある日突然、会社に行ったら倒産していた、なんていうニュースがそうだね。たしかに、ある程度移り変わりはあっていいと思うけど、あんまりにも不安定な移り変わりってというのは…、



岩城 頻繁に、みたいな感じですか。

佐藤隆 そう、それだと不安定で安心して暮らせないよね。明日には辞めさせられる

かもしれないっていう状況が続くような社会は、あんまりよくないなって思っています。だから、今の世の中が不平等なことと不安定なことが現象として起きてくると、とても関心があります。

石黒 今から佐藤先生自身のことについてお聞きします。まずは佐藤先生の学生時代について。高校のときと大学のときと両方教えていただきたいんです。いま高校生がいて、興味がありますので。

佐藤隆 わかりました。高校時代は・・・まあ勉強はしなかったですよ。学年でビリから数えて何番目、みたいな感じです。でも、本は読んでいたし社会問題にも興味があった。文化的なものにも興味がありましたね。だから、たとえば美術館や文学館に行ったり、映画も白黒の名画を観たり、文化祭の演劇の脚本とか演出とかやったり、そういったことはやっていました。高三になったら勉強しましたよ。英語の授業の前には単語を調べておくとかね(笑)。勉強が嫌いってわけじゃないんだけど、そういうのを一生懸命やるタイプではなかったですね。

石黒・岩城 なんかわかるような気がします。

佐藤隆 そして、大学受験には当然のように失敗して浪人しました(笑)。浪人した予備校でも、予備校の先生と哲学の勉強会や歴史問題の勉強会をするなんてことばかりしていましたね。

佐藤寿 大学時代はhowでしたか？

佐藤隆 ある大学の経済学部に入ったんですけど、そこでもやっぱり机に向かって勉強するタイプではなかったですね。大学時代は、自分にとってやりたいことを見つけようとしていた時代でした。自分の自由になる時間が4年間もあるっていうのは、生まれてから勤め上げるまでの間だと、大学の間だけなんですよ。あとの時間はそれこ



そ自主性があんまり重んじられない。そういう意味では貴重な4年間でしたよ。

岩城 高校の先生だったら免許取るのに試験を受けますが、大学の先生になるには試験があったりするのですか？

佐藤隆 試験はないですよ。採用の時の面接試験みたいなのはありますが、国家資格試験みたいなのはないです。そういう取り決めやルールは何もないんです。逆にいえば、決められていないので、色々な工夫の余地があるっていうことですよ。私がやった授業の中で、一番授業らしくない授業は、同僚の仲の良い先生にお願いして、その先生と対談をしながら授業を進めたことがありました。学生から見ると、討論番組を見ているようなものですね。でも、そこはテレビじゃなくて授業なので、学生みんなも巻き込んでね、これについて私はこう思う、あなたはこう思う、学生のみんなはどう思うっていうやり方で授業をやったことがあります。

石黒 へえ、なんか色々ありますね。

佐藤隆 そうですね。そういう工夫の余地は、高校でやったら怒られちゃうかもしれないですけど、大学ではそういうことが許されるのだと思いますよ。

佐藤寿 面白そうですね。

佐藤隆 大分大学は面白いですよ！

岩城 他にも面白い先生がいますか？

佐藤隆 もちろん、たくさん面白い先生がいます。

受け身な趣味は言わない

佐藤寿 あと個人的な話で聞いてみたいことがあるんですけど、趣味の欄に「強いていえば料理」と書かれてありますよね？

佐藤隆 今はもう料理はあんまりしなくなっちゃいましたね。今趣味というと・・・うーん。私は、学生にも言うんですけど、趣味は何ですかって言われて受け身的な趣味は言わないようにしているんですよ。例えば音楽鑑賞とか読書とかね。学生には、音楽を鑑賞するより演奏すること、本を読むことより本を書くこと、そういうふうに自分からアクティブにやるような趣味を言いなさいって伝えているので、私も訊かれたらそうしなきゃいけないですね。強いて言うと、・・・うーん何だろう？ 最近なんかもう生活が趣味みたいになっちゃって

るので……。

石黒・岩城・佐藤寿 でした、名言(笑)。

佐藤隆 じゃあ、趣味は生きることって書いておいてください(笑)。



石黒 佐藤先生は見た目からして若くて、学生の中にも本当に違和感がないのですが…なので、若さの秘訣を。

佐藤隆 実年齢……知りたいですか？ 実際は若くないんですよ。たしかに、先生に見られないことはよくあります。たぶん、さっき写真を撮っていたカメラマンの方、最初私が先生って気づいていなかったみたいだったしね(笑)。

石黒 残念なんですけど、もう時間が来てしまったので、最後に佐藤先生から一言まとめをお願いします。

佐藤隆 たいがいの人は世の中の謎に気がつかない。いや、世の中に謎があることすら気がつかない。だから、世の中には解かなきゃいけない問題があるんだということを、是非学生さんには知ってほしいと思います。謎は、解かれるべくしてそこにあります。そして私としては、私がそういう謎の在り処を教えるよりも、自分で謎を発見して解いてもらう方が嬉しいので、そういう謎解きのできるような人になってほしいなって思います。

……ちなみに、私の実年齢はゼミ生しか知らないトップ・シークレットなので、この謎を解きたい人は佐藤ゼミに入って下さい(笑)。

石黒・岩城・佐藤寿 佐藤先生とはじめて話せて、新たな一面を知ることができてよかったです。ありがとうございました。

キャンパスレポーターを終えて



大分雄城台高校3年 佐藤 寿洋

佐藤先生と対談する前の打ち合わせで、「大学生のような先生」という噂を耳にしていたので、「どんな方だろう」と不安半分、期待半分で当日を迎えました。けれど当日はとてもフレンドリーに対応していただいたので、その不安は一気に吹き飛んでしまいました。「機関車トーマス」や「おかあさんといっしょ」といった番組の話で盛り上がったときには、それまで抱いていた「大学の先生＝非常に遠い存在」という印象が薄れ、親近感すら感じていました。

また、先生のお話の中で経済分野には、明らかになっていない「ナゾ」がまだ現代にもあるという点に驚き、さらには経済から人を助けることができるという点に希望を感じ、学んでみたいという意欲が高まりました。

大分雄城台高校3年 岩城 仁

私は、今回の体験を通して改めて大学というものを知ることができました。今までは、大学ではどういった勉強をしているかは分からないものの、なんとなく自由なイ

メージが漠然とあるだけでした。しかし、佐藤准教授とお話しさせていただいて、大学で行われていることが少しずつ分かってきました。どういう学問が行われているかが見えてきたことで、今まで以上に大学に行きたい気持ちが高まってきたことは大きな収穫です。そして何より佐藤准教授との会話を通じて、今まで“教授”という言葉に抱いていた、雲の上の存在、何事にも精通しているけれど気難しくて近寄り難いというイメージが変わった気がします。私は大学進学希望ですが、今回の体験のおかげで受験勉強が無味乾燥した単なる勉強ではなく、目標をもって自らチャレンジしていくハードルとして向かっていける気がしています。

経済学部経営システム学科3年 石黒雅子

教え方に決まりのない大学だからこそこできる授業の進め方を考えたり、生徒に自主性をもたせるためにゼミを工夫したりしていることに感心しました。

また、生徒の親しみやすい服装を心がけているなど、生徒想いの先生だという印象を受けました。そのため、とても良い雰囲気気で話を伺うことができたので、楽しかったです。



インタビュー実施日 2009年8月31日